

20 世紀初頭における上海日本人住宅地の建設過程に関する研究

陳 雲蓮

名古屋大学大学院環境学研究科博士研究員

2011 年 11 月申請当時: 外国人特別研究員

[研究報告要旨]

本研究は、20 世紀初頭における上海の旧日本人住宅地であった北四川路地区の建設過程を明らかにすることを目的とする。具体的に、19 世紀末期から上海共同租界を支配していた英国人主導の工部局による北四川路とその周辺地区の整備過程、20 世紀前半から日本人による北四川路地区への移住経緯とそれによる当該地区の変容過程、日本人用住宅の開発実態と日本人による居住形態、及び日本人用都市施設の建設、最後に在上海日本領事館による都市インフラ、そのほかのサービスや権利の獲得過程との視点から当研究課題を論じた。その結果、近代上海日本人住宅地は日本人による活動のみではなく、近代上海で成立していた英国人を主流とする国際社会の中で形成されたものと判断する。

北四川路地区は、工部局管理下にあった越界築路区(Extension Area)で正式な上海共同租界の一部でもなく日本租界でもなかった。工部局による本来の意図では、虹口リクリエーショングラウンドの建設と共に、北四川路、及びその周辺地区に学校、教会と住宅を開発し、同地区を上海における一つの郊外住宅地として建設しようとした。しかし、1900 年代から日本企業による当該地区での土地購入、日本人小学校の開設に伴う日本人の移住により、北四川路地区は次第に日本人住宅地として変貌していった。日本人の居住していた家屋は外国風のテラスハウスと中国風のローハウスが多く、いずれも木造の骨組に煉瓦を充填した壁を持つ形式で日本の伝統的な木造家屋ではなかった。その中で、日本人はテラスハウスで前庭やベランダ空間、ローハウスで路地、「天井」という中国風の中庭を楽しみながらも、内部には坪庭や和室を設置していた。それに加え、住宅地周辺に日本庭園、女学校、神社といった日本人独自の施設を整備した。一方、都市施設のみでは、各種都市サービスが完備する健全な住宅地として機能出来なかったため、上海日本領事館が租界の官僚や中国政府と交渉し、北四川路日本人住宅地の安全保障、水供給、電気、ガスなどのインフラを導入していた。上記の過程を経て近代上海における日本人住宅地が成立出来たのである。